予告 Future Event

企画展 2

# ジョージ・ハーディ 作品展「MANUAL」

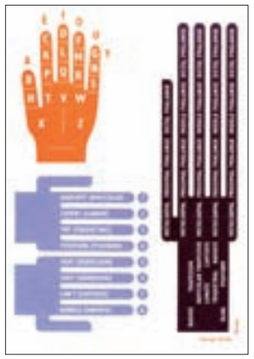
**2006年10月5日［木］－18日［水］**
**12:00➔18:00（日曜・祝日休館　最終日は17:00まで）**
**会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター**
**公開レクチャー：2006年10月12日［木］B棟大講義室**

**2006年度名古屋芸術大学アート＆デザインセンター企画展として、英国のグラフィックデザイナー／イラストレーターとして活躍するジョージ・ハーディ氏の作品展を開催いたします。また展覧会に合わせ、ワークショップ、公開レクチャーも開催いたします。**

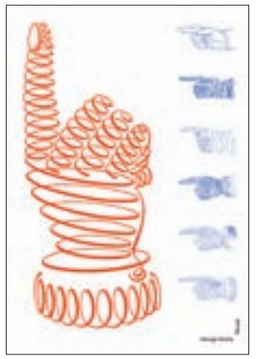
ジョージ・ハーディ氏は、1960年代より英国の記念切手のデザインをてがけ、近年ではミレニアム切手をデザインしたことで知られます。また、1970年代には伝説的なデザイン事務所「Hipgnosis」とともにピンク・フロイドやレッド・ツェッペリンのレコードジャケットを手がけています。なかでも1975年に発売されたピンク・フロイドの「炎～あなたがここにいてほしい(Wish You Were Here)」は世界1600万人によって購入されました。そしてこのレコードジャケットは、ジョージ・ハーディ氏の最も記憶に残る作品となりました。

30年来続けている「手」に関する本「MANUAL」の制作は手作業で行われ、氏のライフワークともいえる仕事となっており、アーティストブックというよりは、依頼者のないグラフィック作品集といえます。本展ではこの「MANUAL」を中心に展示、ワークショップ、講演を行います。

「robotic handshake」


「manual1」

「manual2」


「manual4」

**アート&デザインセンター**
**6 EXHIBITION → 10 SCHEDULE**
**展覧会スケジュール**

**Open 12:00—18:00**
（最終日は17:00まで）
日曜・祝祭日休館
但、9/17(日)のみ開館いたします。

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。

| | | |
|---|---|---|
| 6/16金→ | 6/27火 | 企画展1 水野シゲユキ展「残骸の小宇宙」— 求道としてのプラモデル— |
| 6/16金→ | 6/27火 | マラエ科大学教員交流展 |
| 6/30金→ | 7/ 5水 | 素、材。展 |
| 7/ 7金→ | 7/12水 | 洋画コース3年選抜展 |
| 7/14金→ | 7/19水 | 前期留学生作品展 |
| 7/20木→ | 9/15金 | 夏期休館 |
| 9/16土→ | 9/17日 | 「動物園、そう言えば行ってないね」 |
| 9/22金→ | 9/30土 | ソフトスカルプチャーへ展 VI（仮） |
| 10/ 5木→ | 10/18水 | 企画展2 ジョージ・ハーディ作品展「MANUAL」 |

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

編集後記

「救援パック・プロジェクト」と「こどもテント・プロジェクト」。インドネシア、ジョグジャカルタ近郊を震源地とした大地震。現地で暮らすアーティスト、廣田緑さんは自身の被害こそ少なかったものの、現地のあまりの悲惨な状況を目の当たりにし、日本の家族・友人からの支援を元に、「救援パック・プロジェクト」をスタートしました。先日、地震から１ヶ月を過ぎた現地の近況報告メールが届きました。私たちは日々のニュースに振り回され、過ぎてしまったことをなかなか検証することもできないのですが、廣田さんのブログを読み、改めて援助を継続していく大切さを知りました。地震大国のインドネシアと日本。決して対岸の火事ではありません。廣田さんの活動に興味を持たれた方は、**http://midoriart.exblog.jp**をチェックしてみてください。


Ble　Vol.13
発行日　2006年7月15日
編　集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　刷　サンメッセ株式会社
2006 Printed in Japan


© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

**最寄りの交通機関をご利用の場合**
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるが下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

**自動車をご利用の場合**
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

# B!e

2006 Vol. 13
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 OTAKU

# 疑似オタク的生き方のすすめ

ずいぶんと前から、芸術のことを考えたり、作品を発表したりするたびに、「オタク」的生き方に興味がわいてきて仕方がなかった。
例えば、「絵画は死んだ」とか聞くと特にね。
本当は、芸術が終わったと言われるわけは、ソレが不必要だったり、愉しみ方がわからない人が、増えただけのことなのだし、作る側からすると、人間として生まれて、自己の存在確認へのストラッグル（あがき）が無くならない限り（他人と脳を交換出来ない限り）永遠に不滅なのだけれど、、、
でも、世の中の人がいらないってものを作るのは、とても辛いことだし、当然お金にもならないから、生活が苦しいだけじゃなく社会的にもバカにされるから、これで病気にならなきゃよっぽど神経太いよね。
そこで、疑似オタク同化作戦です!つまり、お金にもならず、社会的にも見下されても、幸せにいきる術を知っている人達の生き方を学ぼうというわけです。
たとえ、一般に言われるオタクの美意識が低俗にして下品であっても、このさい他人の質には、眼をつむりましょう。肝心なのは、民主主義的社会において、他者に評価されないというのは、砂漠での彷徨にもにて、自分が被害者であると考えるとココロが壊れてしまうので、自らを積極的に修行者であると考えるということです。
キリスト、聖ヒエロニムス、また、宮本武蔵、大山倍達などなど、みんな、積極的被害者（修行者）なのですから!
そして、本当に興味のあること、後悔しないこと、だけを、極め、もう発表なんてのは時間とお金の無駄無駄～なんて考えも有りの生き方のすすめです。
ただ、誤解なきよう、つけくわえますと、いくら孤独であっても芸術の目的は、情報伝達であり、精神の物質化によって、ココロを伝へんとする行為なのであって、芸術家は決して自閉的精神異常者（アウトサイダー）では無いということです。
人間は本質的には他者の脳を理解することは出来なくても、構造、環境の類似から、かなりの共通の感覚、思想をもつことも、また真実で、その共通感覚を信じるが故、傷つきながらも互換性のある表現がうまれ、理解しうる少数の同士達と感動を共有出来る事を望んでもいるのです、いつかはね・・・って。

吉本作次 美術学部絵画科洋画コース 教授

吉本作次「森と聖人」2006年

残骸のある風景Fallen Eagle
(1/48) 2005年制作

残骸のある風景（危ない橋）
2006年制作

爆破されたIII号戦車
2004年制作

フェルディナンド501
2003年制作

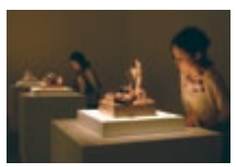
daircama

特集 OTAKU 求道としてのオタク

写真：林 裕巳

荒涼たる大地、奇岩にも似た廃墟、旅人ならぬ死に行く兵士達、戦車は人工物を越えて、大いなる自然の荒ぶる神として人間に存在の虚しさを問う。立体でありながらまるで12世紀の北宋画を見るようだ。それらの絵画群も氏の作品と同じく、驚異的描写力からなるあらゆるディテールに焦点を合せたまま、視点の移動によって、作品内を徘徊、逍遥することで、見る事を体験とする。こういった16世紀以後の西洋絵画が失った世界観をもちいて、水野氏が我々に突きつけているのは、サブカル系アートなどではない、恐ろしく現代的な古典表現なのだ。（吉本作次 談）

**2006年度最初の企画展は、プラモデルの改造ジオラマで知られる水野シゲユキ氏の作品を紹介しました。**
**現代美術作家として、中部・関西を中心に作品を発表していた水野シゲユキ氏。作品制作と並行して制作していたプラモデルの改造ジオラマが、国内で受賞を重ね、いまではプロのモデラーとして非常に高い評価を得ています。**
**会場では全国のコレクターからお借りしたジオラマ作品の代表作を中心に13点の作品を展示しました。また、6月16日の会期初日には、水野シゲユキ氏と本学美術学部吉本作次教授との対談も行われ、北宋画との対比など、熱い時間が流れました。**



# レビュー REVIEW レポート

## 杉江淳平 追悼展

**2006年4月30日 − 5月28日の土・日・祝日**
**名古屋芸術大学 常滑工房ギャラリー**

昨年7月に亡くなった本学教授、杉江淳平先生の追悼展を常滑工房にて開いたのは、常滑が先生の生まれ育った地元であり、日本6古窯である古くからの焼き物産地ということ、またこの工房は、先生が8年ぐらい前から工房として設備を整えながら学生たちにもう一つの教育の現場として用意してきた場所だからです。特に一昨年には工房の一部をギャラリーとして使えるよう整備しました。常滑工房は卒業生たちの発表の場を広げるためであり、また、地域住民との繋がる場所でもあり、常滑焼きを見に来る観光客に本学をアピールする場所でもあります。

今回の展示は先生の追悼の意味もありますが、先生が育てて来られた工房とギャラリーを一般に公開する機会を持つためでもあります。今までの工房は準備段階でありましたが、これからはギャラリーを始め、みんなに使われる工房になるのが杉江先生の遺志ではないかと思います。セラミックコースだけではなく、他の学科の学生たちみんなに活用される愛される場所であって欲しいです。

美術学部造形科 非常勤講師　金 云錫

## Reデザインプロジェクト

**2006年5月 −**
**名古屋青少年文化センター（ナディアパーク7F）**

もともとあるモノを生かそうとするからこそ、発見出来る事がある。
デザインをするという事は、他の人には無い視点でモノを観察する力が必要となる。

このReデザインプロジェクトは、実際にあるモノを目の前にして、良く観察し、壊して、生かそうとする中で、そのモノが持っている様々な事を発見出来るプロジェクトだ。今回は誰もが一度は目にした事がある、学校で使用していたパイプと木で出来た椅子とテーブルを新しくデザインし直し、名古屋のナディアパーク７階にできた7th Cafeという所で実際に使用してもらう試み。

参加メンバーは、スペースデザインコース３年生の有志。彼らは制作期間が約1ヶ月という短い期間の中で、休日返上で制作し、学内およびクライアントへのプレゼンテーション等も踏まえながらデザインと格闘した。（協賛:名古屋市文化復興事業団）

デザイン学部　非常勤助手　荒木雅和

６年程前、名古屋芸大のOB数人と廃棄処分された幼稚園の椅子を、re-designしたことがあり、その時、今は助手として活躍している荒木君もそれに参加した。一般的に見れば価値の無いと思われているものに光を当て、そこから何かを読み取り別のものに転用したり、Re-designすることは高度な編集作業に似て、難しく面白い。今回、時間が限られていた中で、学生達は自主的によく行動し、互いに意見を言い、楽しい集中ゼミをやっている感じであった。体育会系の一面を持つ荒木君のおかげである。

デザイン学部教授　平田哲生

## 岩井義尚彫刻展

**2006年6月21日− 27日**
**ギャラリー スミ（名古屋）**

形　自然のモノをスケッチ・クロッキー・デッサンしていると、その源は球体、それも機械的な球ではなく、心地良い球形の単体又は複合体であると考える。後、視覚に訴えかけるのに重要である水平要素、垂直要素とそのものが創り出す空間により構成されている。作品における一つの方向は、形の根源を動物・植物・自然現象から取り、素材を木によりそのイメージを表現しているものと、木が持つ存在・力強さ・素材感を生かす形を見つけ出し、構成していく方法で表現している。
（今回の立体作品の５点は、旧西春町米野神社の集会所建設のために伐採された楠を使用している。）
他方は平面考察で、これは1998年4月〜1999年３月まで、イギリスで（コンウォール地方の王立ファルマス美術大学にて研修）している時に出会った「エッチング＋手彩色」の描写方法に影響される。おおくのフリーハンドによる平行線を使い、ある所には色（ブラッシュ）を足し、小さなスペースで奥行を作り出すペン画による表現をしている。

美術学部助教授　岩井義尚

## GUNDAM GENERATING FUTURES展

来たるべき未来のために ― 高浜特別展 ―

**2006年6月10日− 7月23日**
**高浜市やきものの里 かわら美術館**

会場写真：高浜市やきものの里かわら美術館
© 創通エージェンシー・サンライズ
© 2006 Houran Yokoyama

「来たるべき未来のために」をフレーズに昨年の夏から大阪、東京、仙台と各地で開催されたガンダム展。1979年からのTV放送を見た当時小中学生であったガンダムファン少年が大人になったことで、現在ではある一定年齢層（30代〜40代）に非常に多くのファンが集中している。一見すると少年向けアニメであるがそのストーリーには戦争や人間愛といった古典的なテーマを含んでいたことで、多くの人々の心をつかみ社会現象になったことは言うまでもない。このガンダム展はその過去のアニメの要素を背景に、いわゆる現代美術の分野で活動するアーティストに作品を出品させ展示させることで現代社会を浮きぼりにするといったユニークな企画展である。

本学の美術学部洋画コースの卒業生でもある横山豊蘭氏もこの展覧会に参加し、いくつかの作品を出展した。もともと書道家であった横山氏も大学では美術を学んだが、そのことと同時に映画やアニメ、サブカルチャーといった彼自身の趣味趣向が強く影響されることが作品を生み出す要素となり興味深い。またその作品たちは観るものに強い想像力を与え、美術の境界を刺激する。今回も「書道」「現代美術」「ガンダム」といったキーワードを絶妙にうまく取り込みながら様々な素材を使用して作品を展示した。そしてその作品には一つ一つ彼独自の視点や愛情が強く反映され、表現としての面白さと新たなイメージが構築されていた。なぜならば彼も自ら一人のガンダムファンであるからであろう。

美術学部　助教授　須田真弘

# RELAY ESSAY

## 翻訳は楽しい？苦しい？ …… 橋本裕明

一昨年からヘッセの邦訳新全集の刊行が始まった。新潮社版の全集からかなりの年月がたち、今回ドイツで始まった未発表の作品を収録した新全集の順次的出版に合わせたものである。わたしはクジ引きで外れたため（?）、ナチス政権成立の頃までに書かれた17短編の担当が決まった。これは今まで担当した翻訳と比べてひどく難儀な仕事になった。最初はベッドに寝転がって物語を読み、喫茶店で軽快にコンピュータのキイを叩いていたが、最後に翻訳できない作品にぶちあたった。

それはヘッセが1932年に書いた断片「眠れぬ夜に」であり、題名に金縛りにされたのか、〆切前夜は寝つかせてもらえなかった。どうやらヘッセが薬をのんで幻覚状態の中で書いた、無意味の作品（?）だった。いくら新全集だとはいえ、文芸批評家がそっぽを向くものを訳す意味があるのかと思ってはみたが、「全集だから全部必要だよね」とあきらめた。

その最初の訳稿をお見せしたい。キイなる語には接頭辞Evi-が被せられている。

「昔、何でも徹底的にする男がいた。すべてを彼は〈明白(Evidenz)〉にしようとした。夜は〈大いに手足を伸ばして(Evipanz)〉眠ろうとしたが、めったに成功しなかった。夜中に何度も〈ひどいパニック（Evipanik）〉になって起きてしまい、麻薬〈エヴィパン（Evipan）〉を飲まずにはもう眠れなかった。それもすぐには効かなくなり、もうよくは眠れず、まどろみながら〈エヴィパン服用による大視覚的現象（Evipanoptikum）〉を見たが、その形象に苦しめられた。〈古典的万有神論（Evipantheismus）〉の陽気さへと逃げ出さず、反対に不機嫌になってしまった。そこで彼は、ふて腐れ者〈エヴィパンクラーツ（Evipankraz）〉と呼ばれるようになった。彼は〈大パンドーラ（Evipandora）〉の缶を開けようとして、缶切りで〈大失敗（Evipanne）〉をした。そこで〈大パナマ（Evipanama）〉へと逃げ、その地で〈大きな豹（Evipanther）〉に食べられてしまったとのことさ。」

この時期のヘッセは薬なしでは精神的安定が保てなかったが、この手のものを訳させられる人間も落ちてしまう可能性があるのだ。う〜ん。

デザイン学部教養部会教授